





学歴もあり、家庭にも恵まれた、超エリート社員である良太は、常に自信に満ちあふれていた。しかし、息子慶太の難関私立小学校への入学を目前に控えている中、医師から衝撃の事実を告げられることになりました。——「子供を取り違えた」と。

動揺を隠しきれない妻、みどり。良太が秀麗な顔立ちと均整の取れた身体を持つのに対し、みどりは野暮ったく、不釣り合いということに気付いていた。時が進むにつれて嘔み合わなくなっていく会話。そんな家族を待ち受けていた真実、そして結末とは……。

この話は、二〇一三年第六六回カシノ国際映画祭で審査員賞を受賞、世界中の人々に感動を巻き起こした映画を小説化したものです。監督である是枝裕和さんは、子供が幼い時から仕事が忙しく、あまり家にいる

ことができなかったそうです。そのせいで子供は自分に懐かず、是枝さんは「今の現代社会における親子関係とは何なのだろう」と思ったと話していました。今の世の中、両親が夜中に帰ってくるという家だっただけなくありません。親はいくら子供のために、と言っても、子供にとって親とは「ずっと一緒にいて育ててくれた人」だと思うのです。

血のつながりか、愛した時間か。良太は子供が取り違えられたことをきっかけに、父と子、また家族の関係を問い直していき、徐々に温かみのある人間へと変化します。様々なことから、親は子から学んだことが沢山あったのです。家族とは、皆一丸になって苦難を乗り越えてこそ、本当の意味での家族になれるのだと思います。本来の家族のあり方、人との繋がりを考えさせられます。

『そして父になる』

宝島社 是枝裕和 佐野 晶

三年 N.N.N.

# 分類される性格

目の前に、やせて背の高い人、太り気味な人、筋肉質な人の三人がいるとします。あなたはそれぞれの人の対してどのような印象を持つでしょうか。

やせて背の高い人には真面目でもの静か、太り気味な人には温和で友好的、筋肉質な人には義理がたい印象を受けませんか？

容姿と性格は何らかのかたちで関わっているように思う人も多いのではないのでしょうか。

人間の性格は体形に関係しているという観点から人格研究をしたのがドイツの精神医学者であるクレッチマーです。クレッチマーは人間の体形を細長型、肥満型、闘士型の三つに分け、気質を分裂気質、循環気質、粘着気質の三つに分類しました。

やせた細長型は分裂気質で、非社

交的で真面目でもの静か。肥満型は循環気質で、社交的で現実的、友好的であるが気分の浮き沈みが激しい。筋肉が発達し骨格が頑丈な闘士型は粘着気質で、几帳面できれい好きで義理がたく物事に熱中しやすい性格としました。

この人格研究についてはクレッチマーの主著である『性格と体格』で述べられています。体格で性格を決めてしまうのは非合理的であるととして、現在この考え方は疑問視されつつあるようですが、他人を見る時の一つの見方として知っておくと面白いと思います。

心理学や精神医学の見地から、自分や他人を見てみては如何ですか？誰かの新しい一面を見付けられるかもしれません。

『図解でわかる心理学のすべて』

日本実業出版社 深堀 元文

『性格の理』

金子書房 本 明寛

六年 M.O.



## 「人の幸せ」研究

人の幸せには、「人」を中心とした研究が大きく関わっていると思います。多くの研究は、何らかの形で人を幸せにすることを目的としています。研究は、直接「人」を対象としているからこそ、「わかりやすく人を幸せに出来る」のです。

この本は、十二人の研究者によって、人を幸せにすることを目的とした研究について書かれたものです。その中からいくつか紹介します。

一つ目は、機械で食べ物の見た目のサイズを実際より大きく見せたり小さく見せたりすることで、満足するまで食べる食事の量を変え、ダイエットすることができるという研究です。食べ物の見た目が変わっただけで満腹感が変化するということが実験からわかっています。このシステムは食事バランスを整えることにも役立つことが良いと思います。

二つ目は、「かわいい」という感性で世の中をわくわくさせ、もっと日本を元気にするという研究です。形は曲線系、色は彩度が高い色、大きさは小さいもの、がかわいいと思われているという実験結果はおもしろいと思いました。

三つ目は、芋エネルギーで地球を救うことができるという研究です。人類は今、地球温暖化や放射能汚染などの問題を抱えています。芋を大量に栽培してつくったエネルギーを化石燃料や原子力の代わりに利用できるようにすれば良いと思います。

これらの研究のように、できたらいいなという夢のような思いつきが未来を変え、人の幸せにつながるのです。

「人を幸せにする目からウロコ」研究

岩波書店 萩原一郎 307頁

四年 R.O.

## オレたちバブル入行組

銀行を舞台にした物語です。主人公である半沢直樹は東京銀行大阪西支店の融資課長です。半沢は、気の進まない支店長からの融資案件を無理矢理通したことで追いつめられていきます。粉飾決算が発見され、融資先の会社は倒産。社長は借金を回収できず、その責任を全て押しつけられた半沢は、出向に追いやられる危機に直面する。ドラマでも大人気になり、「倍返しだ！」というセリフが話題を呼びました。そう、半沢は追いつめられた後社長の行方を追い、金融庁と争いながらも借金回収に奮闘し、やがて倒産の裏に隠されたからくりが見えてきて、大反撃に出るのです。周りに何と言われようが、自分の意志を絶対に曲げない半沢の姿に惚れます。

主人公が追いつめられれば追いつめられるほど読者は主人公の気持ち

になります。また、この本では良い具合に初めから支店長が自分のミスで半沢を助けて半沢を責め立てます。そこで半沢とともに悔しがる、もうページをめくる手は止まりません。しかし、半沢が倒産した会社の経理課長を意地悪く問いつめるシーンがあり、そこだけは半沢の気持ちになることができませんでした。それも面白いところです。真つ当な人間をも歪めてしまう銀行という場所でもよりリアルな人間を描くため主人公にも感情移入を阻むほどの行動をさせています。本書では「銀行の常識は世の中の非常識」とあります。しかし、銀行員に限らず私達学生にも理不尽や歪みがあります。なのでこの本はずしりとくるものがあります。どんなに小突かれても折れない半沢の姿を見ると、明日も一日頑張ろうという気持ちになります。

「オレたちバブル入行組」

文藝春秋 池井戸 潤

三年 M.W.



「人」について(人の定義や他の動物との違いなど) 国語・美術・理科・歴史、それぞれの先生に尋ねてみました。先生方の考える「人」とは？

人とは、自分の思ったように道具や火を使いこなせる動物。

人は体に対する脳の容積の割合が大きいので、言葉を話したり、二足歩行をすること、そして火を利用出来るが、火を利用するのは特に難しい。他の動物はそこにあるものをそのまま使い、せいぜい削る位だが、加工・変形させるのは人だけだ。人はコミュニケーションをするために目の動きが見えるようになったという仮説がある。人には白目があるので、「目が合う」という感覚があるが、これは非常に人らしい感覚だと思う。



人とは言葉によつて生きる動物だ。

言葉があることで初めて考えることができる。

人には自己客観視という能力がある。物理的には不可能な「自分を見る」ということを、言葉を使うことで可能にした。言葉によつて自分が何者であるかを見ようとするとする。

例えば「私頭悪いし」という言葉を人が持ったとき、人はその「頭悪い自分」がどう生きていけばよいか考え始める。それこそ人らしい人生の始まりだ。

人は、苦しみを言葉によつて捉え直し、言葉によつて新たな価値観を得、言葉によつて自分の苦しみを肯定する。

人らしい人生とは、言葉によつて苦しみを生きることだ。

人とは、考えることが出来る生き物。

他の動物は生きる為に生きているが、人は哲学という学問がそれを表しているように、いつの時代も、何の為に生きているのか、苦しみの中をどう生きていけばよいかなどと考えながら生きてきた。

考えるから苦しいのだが、考えないで生きていくなど、つまらない。人は絶えず考え、苦しみつつも逞しく楽しんで生きてきた。これは凄いいことだ。

今までの歴史の中で、様々な人が悩み、苦しみ、考えてきた中には、今の私達と同じような悩みがあり、その答えを出した人がいるはずなのに私達はそれに甘んじて考えることをやめようとはしない。

こうして苦しみながら考えることをいつの時代も飽きもせず繰り返すところが、人間の、時に愛らしいところだと思う。



人とは「嬉しくて悲しい」のように、いくつか混在するような複雑な感情を持った生き物。

人は他の動物と違い、理性によつて本能を抑制する事ができる。人が悩み、迷うのは理性があるからこそだ。

人は絵画に限らず、音楽や踊りなども含め、芸術的な面から発祥したのではないかと思う。

文字の原形に象形文字があるように、人は文字を使う以前から壁画を描いたり、器に模様を彫ったりするのを知っていたのだ。

他にも、子供に紙と鉛筆を渡すと、まず絵を描き始める。それは人間の本能がそうさせているのではないだろうか。





# 世界の子どもは：

みなさんは世界中に居る人々がどんな暮らしをしているか考えたことがありますか？この本には写真を通して世界中の子どもの姿が表されています。

この本の魅力は様々な国の生活の違いがひと目でわかることです。

この本を読むと日本はすごく恵まれている国なのだということを実感させられます。例えば、私たちより小さい子どもたちが当然のように働いている写真があります。私たちは幼稚園や保育園、小学校に通っている年頃なのにとおどろかされたりします。逆に日本だけでなくこの国も同じだと思ふこともあります。例えば楽しそうにドッジボールやトランプをしている写真がそうです。国や言葉が違っても遊びは同じことがあるのだと読んでいて面白かったです。

またこの本では、世界各地に住んでいる沢山の子どものちがいを写真にして分かりやすく表現しています。

なので、国によって貧富の差が激しかったりするのも分かり、おどろいたりもしました。

この本を通じて子どもが学校に行き勉強をしたり遊んだりするのはあたりまえではないのだと改めて感じることができると思っています。少し昔の本ですが、ぜひ読んでみてください！

『田沼武能写真集』

輝く瞳 世界の子ども

岩波書店 田沼武能 384.5 T

一年 H.U.

一年 M.H.

# 人類の進化

人類が地球上に登場したのは約七〇〇万年前のアフリカと言われています。彼らは他の生物と違い直立二足歩行をし打製石器などを使い、狩りをはじめました。約二〇万年前になる頃には今の人類の直接の祖先となる新人も登場しました。

最古の人類である猿人は極めてチンパンジーなどに近く、脳の容積にも大した違いはありませんが、直立二足歩行をしたことなどから

最古人類と言われていて、原人は猿人に比べ脳の容積が約二倍になり言語と火の使用をするようになり、旧人は死者の埋葬をするようになり、新人は洞窟絵画が発見されています。

もし、これから人類が進化してゆくのならどのようなようになるでしょうか。



まず生物の進化というのは自然の変化への適応による長い時間をかけて起こると言われています。そのため、自然からの干渉を受けないままであれば進化は起きないでしょう。

それでは逃れようのない干渉ならばどうでしょうか。例えば自然破壊から起きるオゾン層破壊ならどうなるでしょう。紫外線が強くなり、皮膚ガンや白内障が発生しやすくなり、免疫機能の低下もあるそうです。このようにこれから長い時間をかけて変わっていく自然環境にどのように適応してどのようになり人類が進化していくのか、またしないのか、あるいは滅亡していくのか、現代の人類の中に知ることが出来る人はいません。しかし、自分達ももしかしたら進化途中の人類であると考えたら少し人類の進化に興味湧いてきませんか？

『進化 生命のたどる道』

カール・ジンマー 467.5 Z

四年 K.K.



